

巻頭言

日独両文化の「懸け橋」としての *BRÜCKE*

高橋輝暁

獨協大学ドイツ語学専攻の研究誌 *BRÜCKE* が本号で第 30 号になるのを機に、その誌名の意味を考えてみたい —— そう思って、本誌のタイトルが *BRÜCKE* となった「いきさつ」を調べるべく、草創期の数冊を覗いてみた。本誌の冒頭の短文を「巻頭言」と称したのは第 3 号が最初だ。岩崎英二郎先生の筆になるその「巻頭言」は、「本誌は第 2 号からその名を *Brücke* と改めた。そのいきさつについては知らない」と記した後、次のように続けている。「日独両文化の『懸け橋』たらんとの意気込みないし願いがそこに籠められているのであろうか。」

たしかに、私たちがドイツ語研究の成果を活かして、ドイツ語圏の文化を日本語で説明し、日本の文化をドイツ語で説明すれば、日独両文化を橋渡しすることになり、その媒体としての本誌は、「懸け橋」すなわち *BRÜCKE* の名に値するだろう。ただし、ここでドイツ語を研究するといっても、そのドイツ語がドイツ語圏文化と切り離せないことを見逃してはならない。これは、「言語」と「文化」との関係について一般的に言えることだ。私たちが考えるとき、ドイツ語であれ、日本語であれ、必ず言語で考えている。そのとき、言葉には意味があるから、言葉をつぎつぎと繰り出すことで、意味の連関が形成される。言葉を紡いで、意味の連関という「意味の織物」を織り上げるのが思考だといってもよい。もともとラテン語で「織物」を指す「テキスト」が言葉の集合体のことをいうのは、それが「意味の織物」だからだ。この「意味の

織物」としての「テキスト」が、まさに「文化」なのだ。人間の手になる文化の所産は、それぞれの意味をもって「文化」という「テキスト」を構成する。

たとえば、日光の東照宮も文化の所産としての意味をもち、私たちの「テキスト」の一部だ。自然現象にすぎないはずの「華厳滝」も、観光名所となることで、私たちの「テキスト」に織り込まれる。それどころか、「自然現象」という言葉でこれを思うだけで、この「自然現象」はすでに私たちの「テキスト」に織り込まれ、「文化」の一部を成す。要するに、「言語」は「文化」であり、「文化」は「言語」なのだ。だから、ドイツ語の研究が同時にドイツ語圏文化を研究するのであれば、また逆に、ドイツ語圏文化の研究が同時にドイツ語を研究するのであれば、いずれも「言語」と「文化」の一体性を無視することになる。そのようなことでは、「文化」の「懸け橋」にはなれない。

しかも、*BRÜCKE* が日独両文化の「懸け橋」となるためには、日独両文化を比較対照することでその共通点と相違点とを明らかにし、その解明の成果を日独両文化に向けて発信する必要がある。それなくして、日独両文化間の対等なコミュニケーションと相互理解を目指す「懸け橋」とはならないからだ。ゆえに、日独両文化の「懸け橋」を目指すなら、ドイツ語学専攻の研究は「日独比較対照文化学」*とならねばならない。そのように考えてみれば、ドイツ語教授法を含めてドイツ語すなわちドイツ語圏文化の研究は、私たちにとって「日独両文化」を比較対照する現場であることに気づく。

「言語」と「文化」の一体性を踏まえてドイツ語・ドイツ語圏文化を日本語・日本文化との比較対照において研究することが、*BRÜCKE* をもって「日独両文化の『懸け橋』たらん」とする証だろう。第 30 号を迎えた本誌には、その自覚をいっそう深め、今後ともたゆまぬ努力が続くことを期待したい。

*「日独比較対照文化学」については、Teruaki Takahashi: *Japanische Germanistik auf dem Weg zu einer kontrastiven Kulturkomparatistik. Geschichte, Theorie und Fallstudien*. München (Wilhelm Fink Verlag) 2006 を参照。